

根を支える形態のものが主流で、平面型は長方形となつて、柱の外側の壁際にベッド状遺構と呼ばれる一段高い施設を伴うのが一般的である。そして中央部に炉跡が位置する(図2-99・1)。ほどなく、柱が四本のものが現れ、ベッド状遺構の配置もバラエティーに富むが、炉跡の位置はそのままである(同・2)。この変化の理由は明らかでないが、二本柱に比べて四本柱のほうがより広い空間を確保できるのは間違いない。これ以降の住居跡はすべて四本柱となる。

そして、五世紀後半までには住居跡の北あるいは西の壁に粘土などを使用して造り付けたカマドが普及する(同・3)。カマドも朝鮮半島から伝わった新しい技術の一つで、炉に比べて熱効率を高めることができるため食生活に大きな変化をもたらしたことと思われる。なお、我が国でのカマドの初現は福岡市西新町遺跡で、古墳時代初期の三世紀に遡る(同・4)。朝鮮半島系や山陰地方系の土器を多く出土する特殊な遺跡で、交易の拠点であったと考えられており、いち早くカマドの技術が導入されたことも容易に理解できよう(福岡県教委「西新町遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』第一五四集、二〇〇〇など)。

時として、カマドから延びた帯状の粘土が壁に沿って張り付いたものが見られ、オンドル状遺構と呼ばれている(同・3)。カマドで生じる暖かい空気を粘土で作ったパイプ状の施設に取り込んで暖房などに再利用したものであろうと推測されてい

る。名前のとおり、朝鮮半島の暖房施設を意識しての命名であり、この種の住居跡に居住した人々は渡来人に関わると推測されている。京築地域では新吉富村や椎田町、豊前市などで五・六世紀のこの種の住居跡が比較的多く発見されていて、注目すべき状況にある。

二 古墳時代の服飾

当時の人々がどのような衣装をまとい、装飾品を身につけていたかはさまざまな造形が見られる人物埴輪が一等の資料であり、古墳から出土する装飾品も実物を窺い知る遺物である。

人物埴輪は五世紀後半ごろから現れるもので、したがってそこに表現される姿が年代的にどこまで遡れるものか定かではない。また、豪族の墳墓である古墳に使用されるとい性格から、各階層を網羅的に造形しているとも限らない。農夫像があるといっても、それが一般的な農夫なのか、あるいは指導的地位にある農夫であるのかは即断できないという制約がある。しかし、最良の資料であることは確かである。

男性の場合は上半身の衣(きぬ)(『記紀』による名称、以下同)、下半身の褌(はかま)からなる。衣は前面で左まえに合せて上下二か所を紐で留め、褌は太いズボンで膝下をやはり紐で縛る。女性の場合は男性と同じような衣と長いスカートのような裳(も)の組合せとなる。巫女と思われる埴輪では袈裟のように右肩から左脇へ布

を巻いたものもある。

人物埴輪では耳・首・手首・足首の腰のベルトに玉飾りなどを表現したものもあるが、実際に古墳から出土する玉は材質・形状によって多くの種類があり、硬玉（翡翠）や碧玉といった緑色の材質が特に好まれたようである。また、朝鮮半島との交流が活発化して後は金・銀・金銅・銅などの金属製品も一部で使用されるようになる（小林行雄『日本考古学概説』一九五二）。

三 生産の様相

鉄の生産

前にみたように、古墳時代になって、古墳や各種遺跡から出土する鉄製品の量は弥生時代に比べて飛躍的に増加した。そして、五世紀代になると更に大量の武器・武具・農工具といった鉄製品が一つの古墳から出土するようになる。しかし、まだ国内では鉄の生産を行った痕跡は発見されていない。他方で、鉄素材といわれる鉄錠が主として五世紀代の遺跡から発見され、六世紀前半には減少すること、鉄生産に必要な高温状態を作り、維持するという技術的に共通する須恵器焼成技術が五世紀前半までに導入されたが、それが全国的に拡散するのは同後半ごろであること、そして五世紀前半〜中葉に古墳への

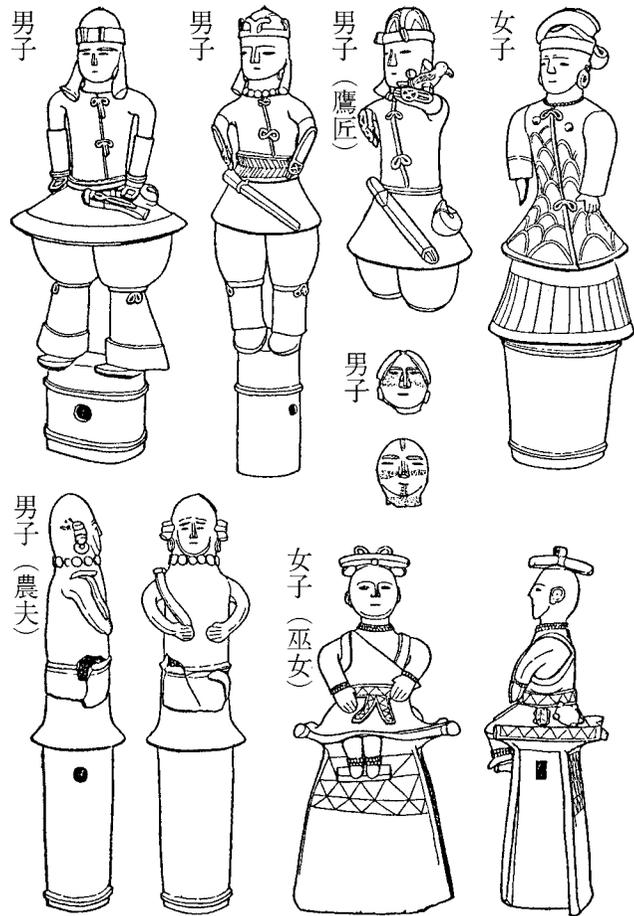


図2-100 人物埴輪に見る古墳時代の服飾
(小林行雄前掲書より、一部改変)

鉄製鍛冶具の副葬が顕著となり、鉄需要の増加が推測されることなどから、我が国での鉄生産は五世紀後半〜六世紀前半ごろと考えられている（東潮「鉄の生産―五世紀の鉄素材の供給地を巡って―」『五世紀の北九州―倭の五王―時代の国際交流―』一九八九）。

六・七世紀代に使用された製鉄炉は長さ一メートル弱の長方形を呈していたようで、その中に木炭・砂鉄を入れて燃やし、^{ふい}轆で送風して精錬作業を行った。西洋の製鉄法が導入された明治以